

## [資料]

## 共同研究と実習の関連における現状と課題

グレッグ 美 鈴<sup>1)</sup> 大 川 眞智子<sup>1)</sup> 岩 村 龍 子<sup>1)</sup> 平 山 朝 子<sup>2)</sup>The Relationship between Collaborative Nursing Research  
and Students' Off-campus PracticeMisuzu F. Gregg<sup>1)</sup>, Machiko Ohkawa<sup>1)</sup>, Ryuko Iwamura<sup>1)</sup>, and Asako Hirayama<sup>2)</sup>

## はじめに

研究交流促進委員会が中心となり、全学レベルで取り組んだ共同研究事業は、今年で4年目になった。取り組まれた共同研究数は、平成12年度19題、平成13年度28題、平成14年度26題であり、今年度は26題が進行中である。

共同研究事業は、本学教員が看護実践現場の課題を研究し業務の改善に直結した看護サービスの質の向上を目指した活動である。しかし大学の活動としての共同研究は、そればかりではない。大学の本来の活動としての教育、とりわけ看護学実習の充実など教育活動の条件整備に直結した活動である。さらには、現地看護職の日常の実践や業務の改善に向けた意識改革を含むものであり、何よりもわれわれ自身の看護学の教員としての意識形成をねらい、看護学の社会的使命を追求する事業である。

今年度から本格的に稼働し始めた看護研究センターは、研究交流促進委員会と協力しながら、看護実践現場と大学との連携を強化することを目指した役割を模索している。そこで、共同研究と実習との関連における現状を全学レベルで確認し、研究交流促進委員会を中心に追及している本事業を一層発展させる基礎資料を提示したいと考えた。

## ． 調査方法

## 1. 対象および調査内容

4力年に共同研究を行った県内施設は、実数にして83施設である。そのうち本学の実習を受け入れている施設の中から、下記の施設選択基準のいずれにも該当した13

カ所を選び、この施設で共同研究を行った本学側教員を対象に、共同研究が実習にどのような影響を及ぼしているかについて面接調査を行った。

施設の選択基準は、下記のとおりである。

1. 平成14年度から継続している、あるいは3年間継続した。
2. 共同研究のメンバーが所属している講座が、領域別実習あるいは卒業研究を行っている。
3. 現地看護職あるいは大学教員の自己点検評価から、現地看護職の積極的な参加が伺われる。

面接の対象となった教員が共同研究を行っている施設は、表1に示すとおりである。なお同一施設で異なる共同研究に参加している異なる部署がある場合は、施設数を2カ所としている。

面接調査における質問内容は、下記のとおりである。

1. 共同研究を実施したことが、実習にどのように活かされているか。
2. 共同研究が実習に活用されている場合、どうしてうまく行ったか（うまく行っていない場合は、なぜうまく行っていないか）。
3. どのようにすれば共同研究を実習に活かせると思うか。

面接対象となった教員には、調査目的を口頭で説明し、参加への同意を得た。

## 2. 分析方法

面接時に記録した内容について、意味を変えないように要約し1コードとした。質問内容に対応しないコード

1) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Collaboration Center, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 学長 President, Gifu College of Nursing &amp; Director, Nursing Collaboration Center, Gifu College of Nursing

表1 共同研究施設と実習

施設名	共同研究テーマ	研究期間	実習名
アルカディア	ターミナルケアの組織的取り組みと援助方法、看護の質の向上と継続性を保証するための施設間連携のあり方	3年目	成熟期看護学学外演習・領域別実習・卒業研究
愛生病院	ターミナルケアの組織的取り組みと援助方法 介護療養型医療施設での患者家族への支援	3年目	成熟期看護学学外演習・領域別実習・卒業研究
羽島市民病院 1病棟5階・1病棟4階・精神科	一般病院におけるターミナルケア	3年目	地域基礎看護学領域別実習・卒業研究, 成熟期看護学卒業研究
羽島市民病院 内科外来	生活習慣病を有する成人・老人患者の看護支援に関する研究	3年目	成熟期看護学卒業研究
美山町	保健師の学校との連携	3年目	地域基礎看護学領域別実習
高富町	全住民への責任性を視野に入れた保健福祉サービス提供方法の検討	3年目	地域基礎看護学領域別実習
白川町	保健福祉活動の展開における保健師活動の原則	2年目	地域基礎看護学領域別実習・卒業研究
川島町	住民と共同する健康なまちづくり計画の策定に関する研究	2年目	機能看護学卒業研究
やすらぎ苑	特別養護老人ホームにおける入居者のその人らしさを尊重した看護援助の検討	3年目	成熟期看護学領域別実習
飛騨地域保健所	難病患者の援助方法と支援体制の充実	3年目	地域基礎看護学領域別実習
養南病院	精神障害者の家族支援の実態と基盤整備	2年目	地域基礎看護学卒業研究
県立寿楽苑	特別養護老人ホームにおける入居者のその人らしさを尊重した看護援助の検討	3年目	成熟期看護学学外演習・領域別実習
県立飛騨寿楽苑	特別養護老人ホームにおける入居者のその人らしさを尊重した看護援助の検討	3年目	成熟期看護学卒業研究

を分析対象から除き、質問に対応したコードを共通点、相違点について比較分析し、分類した。要約と初期の分類について、面接対象の教員に確認し、最終結果は看護研究センターの教員間で検討した。

## 結果

### 1. 共同研究と実習との関連

共同研究を実施したことが、実習にどのように活かされているかについては、6カテゴリーが抽出された(表2)。最も多かったのは、「現場との関係成立による実習の円滑化」であり、9施設であった。共同研究をしたことにより、教員と看護職の関係が深まり、大学が何を大切にし、どのような実習をしたいかということが確実に伝えられ、より円滑な実習が行われている。

次いで多かったのは、「実践の向上による実習内容の充実」であり、6施設であった。共同研究を実施したことにより、看護職の認識の変化だけではなく、適切な看護を行うための患者家族会といった組織作りが行われた

り、研究成果が現場で活用されたりして、実践内容や方法が充実し、学生が実習で良い実践に触れる機会を提供している。

「共同研究実績の学生指導への直接的応用」は4施設であった。看護職が共同研究で得た学びを学生に語ってくれたり、共同研究の結果が訪問の実習対象者の選択に使われたりしている。

「実習準備・打ち合わせの円滑化」は4施設であった。共同研究を行ったことで教員が実習場の状況を理解できるようになり、学生に強調して教えてほしい点や実習の意図を明確に伝えることができています。

「学生の共同研究参加による学び」は2施設であった。教員あるいは現地看護職の判断で、共同研究の一部に参加することが勧められ、そのことで学生が学びを得ていることが明らかになった。

「共同研究自体の影響は不明」という施設も3カ所あった。これらの施設では、共同研究がまだ2年目であることや、共同研究を行っているのが外来であり中心的な実

表2 共同研究と実習との関連

分 類	内 容
現場との関係成立による実習の円滑化 (9施設)	・共同研究により現場と大学が言うこと(方向性)が一致したので、学生が混乱しない。
	・現場側は、よいケアにつながることは提言してほしいというスタンスであり、現場との関係もできているので、学生は遠慮せずに自分の考えを言うことができる。
	・大学と現場との関係ができているため、十分な意見交換ができる。
	・現場が指導してくれるべき内容については現場がすべきことを伝え、現地指導者が学生指導できるよう教員がサポートした(関係ができていると言にくいことも強く言える)。
	・職員との関係が深まった。われわれの看護観・老人観が伝わり共有できたので、学生に対しても、その視点でアドバイスしてもらえるようになった。
	・大学の教員と看護師の関係が良くなり、学生の実習の受け入れが非常に良い。大学が何を大切にし、どんな実習をしたいかということが良く理解されている。
	・話しやすくなったことは確かであり、相談も要求もしやすい。これは共同研究によって信頼関係ができたこと、病院の内情が理解できるようになったことによる。
	・共同研究で形成した人間関係は、実習を円滑に運ぶのに役立っている。
	・看護職との関係ができおり、実習目的・目標がよく理解されている。
	・共同研究者の2名が実習指導者であるため、実習調整が円滑に行われ、学生が実施してみたいと希望することに関しては、倫理的問題もクリアされ全て可能になっている。
	・地域の問題が現場と教員で共有できるので、学生にアドバイスしやすい。
	・共同研究者(看護師)との人間関係ができきて、意思疎通が円滑である。そのため、踏み込んだレベルで話ができるようになった。
実践の向上による実習内容の充実 (6施設)	・患者家族を支援するための組織づくり(患者家族会)へと発展してきた。
	・共同研究の中で3才以降の関わりも大切なことを共有でき、保育所での福祉教育、高校での健康教育、中学校での性教育など、思春期を含めた母子保健活動の内容・方法ともに充実した。
	・共同研究を通して健診結果の当事者への返し方を担当者間で検討し、改善するよう取り組んだ。
	・検討会で話し合われたことや、研究成果は施設で報告され、現場に活かす働きをしている。
	・共同研究で話し合ったことが、日々のカンファレンスで取り上げられ、考え方や看護の方法が変化して来ている。
	・現場の「終末期の捉え方、高齢者の問題行動の捉え方」が変わってきた。
	・共同研究で得られた実態調査の結果について、報告書や広報で住民に還元することができた。健康教育の場や推進員の研修会の場でも住民に結果を還元し、さらにそれに対しての意見を得ることができた。
共同研究実績の学生指導への直接的応用 (4施設)	・共同研究で得た学びを学生に語ってくれる。
	・教員の後押しにより活動の考え方や活動方針に自信が持て、表現できるようになり、学生の学びが深まった。
	・共同研究によって今後の課題が出ていて、特定疾患対策と保健活動の説明時に学生に話してくれている。学生の学びにも、課題を明確に持っているから、よりよい事業につながっていくんだということが書かれている。
	・訪問活動を個別の援助に留まらず地域の問題として捉える視点や、難病セミナー等の他の事業とつながっていることなど、保健師から学生に伝わっている。
	・共同研究の結果、これまでの保健師活動を振り返り、大事にしてきたことが保健師活動の原則でもあったことなどが確認でき、実習においても町の保健師活動の大事にされているところを語ってくれ、学生のレポートの中でも表現されている。
	・共同研究の結果をもとに単独訪問の対象を選択することができた。
実習準備・打ち合わせの円滑化 (4施設)	・教員は、共同研究を通して岐阜県内や病院の状況がわかっているのので、実習や卒研の意図をはっきりと実習担当看護師に対して伝えることができる。
	・実習前の打ち合わせ段階で、この町ではここを強調して学生に伝えてほしいと具体的に言える。
	・共同研究の打ち合わせ等で大学と現場との関係性ができいたため、実習の打ち合わせでも十分な意見交換ができた。
学生の共同研究参加による学び (2施設)	・共同研究の一環で開催しているターミナルケア検討会に、学生が参加しても良いと教員が判断した場合、学生に開催を通知している。現場の力を使って、学生の視野を広げ、学びを深めることを意図している。
	・共同研究の検討会に、現地看護職が勧めて学生が参加した。学生にどこまで内容がわかったかは疑問ではあるが、ここまで問題を追及していかなければならないものなのかという感想を持った。
共同研究自体の影響は不明 (3施設)	・実習場の看護師は、学生を好意的に受け入れてくれ、指導も熱心である。しかしこれが共同研究を実施したことによるのかどうかはわからない。
	・研究内容自体が実習に役立っているわけではない。将来的には、研究内容が実習に役立つようにしたいと思っている。
	・個々の看護師の実践には共同研究は役立っていると思われるが、実習に活かされているという段階ではない。

習場ではないこと、さらには看護職が独立して活動できないシステムであるといった施設側の組織上の問題もあった。

## 2. 共同研究と実習の関連がうまく行っている理由、あるいは不十分な理由

### 1) 共同研究と実習の関連がうまく行っている理由

共同研究と実習の関連がうまく行っている理由は、「実践を改善する共同研究だった」と「共同研究により相互理解が促進された」がそれぞれ5施設と最も多かった(表3)。共同研究が現場のニーズに沿っており、実践の改善に結びついたものであることから、共同研究によって実践が良くなり、それが実習に良い影響を及ぼしている。共同研究による相互理解の促進では、共同研究を通じてお互いを理解できるようになり、実習についても十分な検討が可能になっている。

また2施設では、「共同研究に参加している教員が実習を担当した」ことが述べられていた。これは教員の共同研究者と実習担当者が一致していること、共同研究の主担当教員と実習担当教員間で情報が共有されていることである。

「組織のあり方が影響している」と述べた施設が2カ

所あった。これは施設自体が看護実践の改善に取り組もうとしていることや、それを実行するのに望ましい組織となっていることによるものである。

「共同研究と実習の関連を教員が意識していた」が1施設であった。共同研究を実習につなげることを意図して、実習場の看護職にそのことを伝えている。

### 2) 共同研究と実習の関連が不十分な理由

共同研究と実習の関連が不十分な理由では、「共同研究と実習の関連に対する教員の意識が不足していた」、「共同研究の進行と実習時期が一致しない」、「共同研究が実習内容の一部にすぎない」、「共同研究者のみとのつながりである」、「中心的な実習場でない」、「実習施設の組織上の問題がある」ことが、それぞれ1施設で述べられていた。

### 3. 共同研究を実習に活用する方法

どのようにすれば共同研究を実習に活かせると思うかでは、4つの方法が提案された。「現場看護職と接するとき、共同研究者であり、実習を引き受けてくれている看護職であることをよく認識して対応すること」、「共同研究によって実践を改善していくこと」、「現地看護職と良い関係を作り、それを維持すること」、「共同研究を継

表3 共同研究と実習の関連がうまく行っている理由

分類	内容
実践を改善する共同研究だった (5施設)	・実践方法を開発していく、良くしていく共同研究だった。今の課題にどう進めていけばよいか迷っている部分への関わり、活動の後押しをしていくような関わりだったため、実践活動全体が良くなっていった。
	・共同研究が保健師の思いを後押しするような内容であった。
	・現場のニーズに沿い、問題解決と一緒にいった。
	・共同研究自体が実践と結びついたものであるため、日々の実践が良くなり、実習にも良い影響を及ぼしている。
	・共同研究することで、課題がより明確になり、自信を持って話をしてくれている。
共同研究により相互理解が促進された (5施設)	・共同研究を通じて、教員と保健師・組織との相互理解が図られたことにより、実習についても十分な検討ができた。
	・共同研究、領域別実習、卒研、研究支援事業など、全ての地道な努力の賜物である。
	・特別養護老人ホームでその人らしさを尊重した看護援助として、大学が大切にしていることが共同研究によって充分理解され、実習目的についても理解が深まっている。
	・人間関係がうまくできていることが大きい。
共同研究に参加している教員が実習を担当した (2施設)	・共同研究に参加している教員が実習を担当したので、共同研究の主担当教員と実習担当教員間で、共同研究の経過や先方の反応等を逐一共有できていた。
	・実習担当教員が共同研究を通じて活動の概要を理解している。
組織のあり方が影響している (2施設)	・利用者の立場に立った施設のあり様を考えている施設であることも影響している。公設民営化になり、増床も予定されていて、事務長も看護援助の改善に真剣に取り組んでいる。
	・共同研究者のうち1名はグループホームのリーダーで、もう1名が医務室(看護職)の責任者という立場にあり、看護実践を改革するのに理想的な組織となっている。
共同研究と実習の関連を教員が意識していた (1施設)	・共同研究を実習につなげることを意図し、先方にも伝えていた。



続・拡大すること」である。

共同研究者であり実習担当者であることを認識した対応では、実習依頼時やプログラム調整時に、共同研究のこともふまえて自らの活動内容や考え方を伝えてもらうように依頼することが述べられていた。共同研究の拡大では、共同研究者だけではなく、より多くの看護職に浸透させ、取り組んでいる課題を全体に広げて行くことが必要であると捉えられていた。

### ・ 共同研究と実習の関連における現状と課題

共同研究開始後3年目で、実践の向上による実習内容の充実が6施設で生じている。共同研究を実施している全施設数の83と比較すると、まだ少数ではあるが、継続することにより、多くの施設において実践の改善がなされたならば、学生が良い実践を学ぶ機会が増えていくと考えられる。この観点から考えると、より多くの実習施設で共同研究が実施されることが望まれる。また教員の興味で研究を行うのではなく、共同研究が目指している看護実践現場の課題を取り上げ、業務や実践の改善に直結した研究活動が継続される必要がある。これは共同研究と実習の関連がうまく行われている理由に、「実践を改善する共同研究だった」ことが挙げられていることから、その必要性が明らかである。

実習準備・打ち合わせ・実習自体の円滑化には、教員が共同研究を通して実習場の現状を理解していること、教員と実践現場の看護職が良い関係を形成していることが影響している。共同研究と実習の関連がうまく行われている理由の1つに「共同研究により相互理解が促進された」があるように、教員と現地看護職がお互いを理解することが必要不可欠である。この相互理解は、従来の大学教員が実践現場を研究フィールドとして使用するという形の研究では達成できない。

本学の共同研究は、現場のニーズに沿って、現場の課題を達成するという姿勢で取り組んでいることが、実践現場の看護職との良い関係形成に影響を及ぼしていると思われる。

学生が共同研究の一部に参加するという形で学習することは、ごく少数の施設で行われている。今後、卒業研究を履修する4年生を中心に、その実施を検討する必要がある。

共同研究と実習の関連がうまく行っている理由に、「共同研究に参加している教員が実習を担当した」と「共同研究と実習の関連を教員が意識していた」ことが挙げられている。共同研究に参加している教員が常実習を担当できる場合ばかりではないが、可能な範囲で意識的に繋げて実行される必要がある。学内交流会で共同研究内容を共有する機会を設けているが、この機会を最大限利用し、また共同研究を担当する教員から個別に情報収集する努力も加えて、共同研究と実習の関連を意識する必要がある。このことは、共同研究を推進し教育を充実していくために、全ての教員が実行すべきである。

共同研究を実習に活用する方法として挙げられた内容は、全て関連している。まず共同研究本来の目的である「共同研究によって実践を改善していくこと」が重要である。これには「共同研究を継続・拡大すること」が必要になり、またこの過程において「現地看護職と良い関係を作り、それを維持すること」が必要となる。これらのことにより、実習を円滑に行うことができ、さらに良い実践を学生が学ぶことができる。そして共同研究を最大限に実習に活用するためには、そうしようとする教員の意識が重要で、「現地看護職と接するとき、共同研究者であり、実習を引き受けてくれている看護職であることをよく認識して対応すること」が必須となる。

今回は、共同研究と実習が関連している可能性の高い13施設を選択して調査を行った。今回対象とならなかった70施設の中には、共同研究に積極的に参加していないことが自己点検評価から読み取れる施設もある。共同研究と実習の関連と共に、共同研究のあり方についても今後検討が必要である。

### おわりに

共同研究が実習にどのような影響を及ぼしているのかについての今回の面接調査により、共同研究と実習の関連における現状と課題が明らかになった。これらは共同研究の発展と共に変化するものであり、継続的な検討が必要となる。看護研究センターは、今後も共同研究をさらに発展させ、それを教育に活用する方策を見出していきたいと考えている。

(受稿日 平成16年2月4日)